



『資本主義と闘った男』

宇沢弘文と経済学の世界
講談社 二七〇〇円＋税

佐々木実 著

宇沢弘文

二〇一四年に亡くなった経済学者宇沢弘文の詳細な伝記である。宇沢は社会的共通資本（ソーシャル・コモン・キャピタル）の経済学を作り上げた。社会的共通資本とは、すべての人びとが暮らすための自然、インフラ、制度全体のこと。制度とは、たとえば、医療、教育など、制度あり、公共交通、農業政策、森林保全などに至る。すぐに気がつくように、インフラは言うに及ばず、自治体が、供給、保全、活



りである。社

会的共通資本の理論は、自治体の指針を示し、自治体に働く意味を再確認するものである。

自治労での研究会など

だから、宇沢は自治労とも深いかわりがあった。本書にもその一端が述べられているし、労働組合もそれを受け止めようとしてきた。九八年の全国自治研集会（米子自治研）では宇沢の記念講演が行われた（宇沢は米子出身）。書評子もその講演を直接聞いた。

現在もこれほど影響が大きいのに、この伝記の最終章の結論は切ないものである。宇沢経済学の後継者は？ 伴走者は？ と著者に問われて、宇沢は「いないんだよ。日本にはいないし、海外にもいないんだよ」と答えている。「宇沢は、ひとりぼっちでした」とはお連れ合いの、宇沢が亡くなった後の感想だ。

そんなことはない。経済学界が間違えて続けているだけだ。自分なりのやり方で

自然と社会の公正かつ持続可能性を追求し、宇沢を引き継いでいる人びとはたくさんいる。経済学にいないだけだ。

経済学の世界

本書の帯に「ノーベル経済学賞にもっとも近かった日本人」とある。本文中に登場する言葉ではないが、宇沢を評するにしばしば用いられる言葉だ。でも、この言葉で、宇沢を語るのもうやめよう。だって、「資本主義と闘った男」にノーベル賞なんて来ない。もう少しまじめに言うと、宇沢は主流派の経済学をこてんぱんにやっつけてしまった。宇沢が受賞することは、ノーベル経済学賞の歴史の自己否定になってしまう。

もしこの小文を連休前にご覧になったら、連休を使ってお読みになることをお勧めする。全一八章立て、六三八ページ。連休の半分は潰れてしまいうだろうが、それ以上の過ごし方を思いつかない。

評者 菅原敏夫 本誌編集委員

グラビア	地域を支える人 紺野安彦さん 佐竹謙太さん・福島市	1
発掘！地域の希望のタネ	奈良県橿原市 〈歴史に憩う橿原市博物館〉	5
給食のじかん	〈黒はんぺんのカレー揚げ・かつお角煮〉静岡県焼津市 森田靖司	6
書評	佐々木実著 『資本主義と闘った男』 菅原敏夫	8
焦点	一〇連休特別法と働き方改革 中野麻美	10

特集 外国人労働者との共生をめざして

ルポ	「移民ネグレクト」に終止符を 泥縄式の「労働開国」に懸念も 坂本信博	18
インタビュー	外国人なしでは回らない社会の到来 一覚悟を持った社会システムの変革を 田中 宏	26
	生活支援と権利保障は進むのか 一ゆがんだ移民政策がもたらす、外国人医療の危機 大川昭博	33
	農業分野における 外国人労働力調達への誤解と支援のあり方 軍司聖詞	39
	介護現場を支える外国人労働者の現状と課題 平井辰也	47
	自治体は外国人支援にどう向き合うべきか 一新居みどり	53
	一多文化共生総合相談ワンストップセンター開設の課題	
地域の声を届けたい	⑦改正入管法を考える 岸まきこ	60
各県自治研活動レポート	自治労千葉県本部政策部会の取り組み 中町康人	62
	一千葉県本部	
連載	『月刊自治研』を読む〈第四季〉⑤ 地方議会に候補者をつくり出すために 篠田 徹	64
	自治研センターの機関誌案内	71
	次号予告・編集部から	72